昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
昭和五十九年　五月十五日　発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十六巻　第五号
（通第四一八号）

目次

63.7.23

不思議の仏智――近角常観――(1)
ただ念仏――池山榮吉――(4)
生活断片――酒井演幽――(9)
吾子の死に思う――佐々木徹真――(11)
来生の開覚――井上善右エ門――(14)
一道会の記――榊原徳草――(17)
ともしび――花田正夫――(23)

不思議の仏智

近角常観

人がお慈悲に気づいて喜ばれる様子を見たり、またひとたび気がついた以上は知らぬ間に信力増長して、それからそれへとお慈悲を喜んで下さる人が出来る有様を、まのあたり見せて貰うときは、仏智不思議の広大なることに、ほとんど心も言葉もたえることである。

御一代聞書に「人に仏法の事を申してよろこばれば、われはその悦ぶ人よりもなほたふとく思ふべきなり。仏智をつたへ申すによりて、かやうに存ぜられ候事と思ひて、仏智の御力を有難く存ぜらるべしとの儀に候」とある。

私は、かくの如き場合ほど恐れ入りましたと不思議の御力を仰がして貰うことはない。全体法を説く者が、いつの間にやら如来の教を我物顔にしたがるのである。それ故、我が力にて人に届けようなど計らい心が出て来るものだ。

歎異抄に「わがはからいにて、人に念仏を申させ候はばこそ弟子にても候はめ、ひとへに弥陀の御もよほしにあづかりて、念仏申し候人を我弟子と申すこと、きはめたる荒涼のことなり」と仰せられた。

一分一厘も我等のはからいでお慈悲は伝わらぬ、全然如来の御催しである、如来の御はからいである。

全体我等がこの如来の御思召を忘れるものゆえ、何事につけても愚痴をこぼしたり、我身を歎くことになる。

成程人間は不完全である故、愚痴をこぼすならば一として愚痴の種ならぬはなく、煩悩の凡夫なれば歎かば何事も歎くべきことばかりである。

されどこの不思議の仏智のまします已上はチャンと如来がよきようにはからいたまうのである。火宅無常の人生なればこそ無上大利の名号を与えられてあるのである。煩悩具足の凡夫なればこそ如来清浄願心は捨てたまわぬのである。論より証拠、我等はこうしておけばよかった、ああせねばならぬと思いながら、我が手の廻らぬのを歎いたり、我身の足らぬことを悲しんだり、すまぬ〳〵と思うて居る間に、仏様が丁度宜しきようにお慈悲を届けて下されて、

行くべき道を通りて、一味の信心に入れて下さるのである。

先きほど、羽村に参りて、つく〴〵仏力の広大無辺なるに驚くばかりであった。六年已前ひとたび仏種が播かれてから後、僅か年に一度か二度の御縁でありながら、自然々々人が信に気づかれる、またます〳〵堅固に相続される。

羽村ばかりでない、講話を聴いて下さる人や、雑誌で其を喜ばして頂くのも、一々の方よりその御縁を承りてみれば悉く仏智不思議の御催しならぬはない。

実にこの不思議を離れて仏法はない、本願はない。五つの不思議とくなかに、仏法不思議にしくぞなき、仏法不思議といふことは、弥陀の弘誓になづけたり。

世に不思議ということはあれど仏法ほどの不思議はなく、また仏法に不思議の多いなかに、如来の本願ほどの不思議はない。御一代聞書に「法敬坊蓮如上人へ申され候。あそばされ候御名号、焼け申し候が六体の仏になり申し候、不思議なることと申され候へば、前々住上人その時仰せられ候。それは不思議にてもなきなり、仏の仏に御なり候は不思議にてもなく候。悪凡夫の弥陀をたのむ一念にて仏になるこそ不思議よと仰せられ候なり」とある。

誓願の不思議、名号の不思議というがつまりこの悪凡夫を仏にして下さる御不思議じゃ。親鸞聖人は、ただ不思議と信じつる上はとかくの御はからいあるべからず、と仰せられたが此処である。

仏智の不思議を信ずるを　報土の因としたまへり
信心の正因うることは　かたきがなかになほかたし

聖人の御教化の眼目は畢竟この御不思議を知らしていただくにある。この不思議が不思議と知らしていただけたのは御不思議の力である。たとい仏にすがるとも、念仏するとも、この御不思議の夜が明けねば、畢竟疑惑の行者である。

疑惑和讃に反覆丁寧に、この不思議を信ぜぬことを誡めたまうてある。此悪凡夫を仏にして下さる本願が信ぜられぬゆえに、いつの間にか、知らず識らず自分の力で出来もしない善を為さんと試み、止められもせぬ悪を止めようと試みるのである。

悪い者が、よくよく悪い者であると、全く頭が下がったのが、全く悪い者を捨てたまわぬ御不思議の力である。

悪い〳〵、その裏がよくも〳〵おすてたまわぬ親様と感謝の心ばかりである。

何時も味わして頂く「弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」との聖人の常の御述懐はどれだけ頂いても尽きぬ有難い御自督である。

聖人は、聖徳太子の御導きによりて、この不思議も信ぜさせていただいた御恩を喜びたまい、あたかも疑惑和讃に引き続いて

仏智不思議の誓願を、聖徳皇のめぐみにて
正定聚に帰入して　補処の弥勒のごとくなり。
聖徳皇のあわれみて　仏智不思議の誓願に
すすめいれしめたまひてぞ住正定聚の身となれる。

と御喜びなされている。

しかのみならず、聖人は聖徳太子の御手引によりて家庭生活のままで如来の本願を信じ、在家信仰の化儀をお示し下された。これみな仏智不思議の御はからいによることである。

久遠劫よりこの世まで、あはれみましますしるしには、
仏智不思議につけしめて　善悪浄穢もなけりけり。

と奉讃したまうた。思えば今夜は聖徳太子の祥月御逮夜である。今日我等が同様に、仏智不思議をこうむることの嬉しさ、よく〳〵のしあわせ者である。

法然上人が「念仏は義なきを義とし、様なきを様とす」と仰せられたが此処である。親鸞聖人が晩年までこの御言葉を讃仰されて、行者のはからいなくして、唯如来のはからいにまかせたてまつるべし、と示された。

自然法爾の法語は、この如来の御はからいの至極である。「それゆえに他力には義なきを義とす、つねに自然を沙汰せば、義なきを義とすといふことは、なほ義のあるべし、これ仏智の不思議にてあるなり」と仰せられた。言語がつきて、はや何とも申しようもない御不思議である。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

○　○

白井成允先生の御歌

昭和四年紀元節の日、渡欧の旅、安南国を遠く右舷に眺めつつ、箱根丸読書室にて稿了。

うまれえて三世のほとけの大道をきかしめられつうれしくもあるか

はかりなく弥陀の大御名となへつるこれのいのちのたふとくもあるか

弥陀仏のみ名となへつつおほいなるつとめかしこみけふをはげまん

わだつみのさなかにたちてみだぶつのみなとなへまつる今日はよろしも

ただ念仏

池山榮吉

去年の秋の初め頃から、かねての持病が時々発作的症状を伴うようになって、その趨勢が寒くなるにつれて、じりじりとたかかぶって行くのを覚えた。師走もなかば過ぎる頃になると、やがて迎える新しい年が、何のことはない、高い山ででもあるかのよう。しかも残る九合目からの勾配がいかにも急で、それを越す力が、果してまだ自分に残されているやら、我ながら覚束なく、思わず溜息のもれるのが常であった。

が、その中どうやら年は越せたものの、病勢は一向退こうともしない。学校も休講して静養を専らとしていたが、到頭正月の末から、二月の初めにかけて重態に陥ってしまった。

生死の程も判らない、というよりは、十中の八九むつかしかろうという見方が支配して、家中が冲々たる憂愁の気配にうずもれていた。

自分も今度は駄目かと思った。今夜はまだこうして息をしているが、明日の朝になると、もう眼が閉じてしまっているのではないかと思った。そうだ、息は一つしかなかったなと、常には人の気付かないことに初めて気付いたような気がした。然しまだ絶対に死ぬに決っているとまでは思わなかった。

若し死んだら――あれやこれやと思えば名残りはつきないが、ままよ〝俺にはただ念仏がある〟ベッドの傍、見易いところに、近角君筆の〝乗大悲願船、浮光明広海、至徳風静衆禍波転、即破無明闇、速到無量光明土云々〟の謹録聖訓とある軸がかかっている。

〝即破無明闇〟が特に目をひく。ここまでは現在として解すべきと心証する。

歎異抄のここかしこが、それからそれと浮んで来る。一文一句、仮名一文字に至るまで、張りきった迫力を以て身に逼り心に沁みる。長鯨の百川を吸うように、私がではない、鈔の言葉が、私の全心身を呑み込んでしまう。

もし生きたら、幸に死線を越えたら――今現に体感しつつあるこの味いについて、今一度有縁の人々と語りたい。これが私の唯一つのこされた念願であった。

死の横顔を横目に見ながら、病床に呻吟してる間、いくたび〝ただ念仏〟と黙頭かされさことであろう。例えば、或る時は熱の加減で、たまらなく全身が熱い――断っておくが、当時私の生命をおびやかした病気は急性腎臓炎で、この病気はいろ〳〵錯覚をひき起すそうだ。――すると、忽ち熱さに苦しめられる地獄にいる。私ばかりでない。他にも大勢罪人がいて、皆もかき苦しんでいる。併し私には〝ただ念仏がある〟と心に叫ぶ。私は身体に苦熱を感じながら、心にはゆとりがあって、恐らく顔にはほほえみの影さえさしていたろう。私の苦しみは、ただ焦熱地獄の見学に伴う実験にほかならないからである。

また或時はたまらない悪寒に襲われる。今度は寒さに責められる洞窟だ。ここにも罪人がうよ〳〵いる。けれども私には〝ただ念仏〟がある。今は八寒地獄の視察中なのだ。案内者は〝ただ念仏〟だ。

また、或時は視察の方面をかえて、地上の人間の世界に遊ぶ。すると、情緒纏綿の愛執的生活やら、名聞利養の打算的生活やら、様々の生活の成功者と目される古今東西の代表とおぼしい面々が、したり顔に順繰りに影現する。それからまたやや方面を転じて、智識学問、道徳、宗教、事業、発明、冒険等々の境地を巡礼することもある。乗物はいつも〝ただ念仏〟の飛行機である。

こうしていろ〳〵の人間を見て廻ると、中には随分愛すべく羨むべく、崇敬すべく、驚嘆すべく、各種各様の深刻な感興をそそって、低徊去る能わずの慨ある場面にぶつかる事もあるが、とどのつまりは〝それがなんだ〟。俺にはただ念仏がある〟という合言葉で、フワリとその境地を乗切って次の境地に移り、そこでまた似たような経過を繰返しては、又次の境地に転ずる。その都度々々の合言葉、畳句はいつも〝ただ念仏〟である。

私の飛行機〝ただ念仏号〟がめざすところは、畢境〝ただ念仏の世界〟であった。そこのみが私の志願を残りなく満たしてくれる世界であるからであろう。自道の上空はるか、層雲ついて〝ただ念仏号〟は飛翔する。

ここまで読んで来ると、何だか痴人夢を説くといったような感を抱かれる方もあろう。――私自身にしてからそうだから――が、単なる夢ばかりではない。現に私の今日までの生涯も、考えてみれば大体こんなものではないかと思う。

〝即破無明闇〟私の行方は闇である。殊に近く死と面と向っては、真黒闇の闇である。そこに、そのとき、忽然として閃めく〝ただ念仏〟。私には巨人の腕にかざされた松明

としか思われなかった。実にこの閃きこそ無明長夜の燈炬であり、即破無明闇は、その光芒のとどく限りである。

私には〝ただ念仏〟がついて離れない。念仏だけでよさそうなものなのに、何時も〝ただ〟が冠さるのがおかしい――おかしいというのが変なら不思議だが、実は不思議でも何でもない。歎異抄の文句から来ている。先ず第一には第二章の――私の講演にはよく出てくる殆ど口癖のようになっている――〝親鸞におきてはただ念仏して〟の〝ただ念仏〟である。今一つは、末尾に聖人の仰せとある〝よろずのこと、みなもてそらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにてはおはします〟の〝ただ念仏〟である。

どちらも〝ただ念仏〟である。ただとはほかのものでない。ただひとつという意味である。

私について離れなかったあの〝ただ念仏〟は、そもそもどちらの〝ただ念仏〟であったのだろうか。

初めの程は私自身も、どちらのか判らなかったが、〝ただ念仏〟にかわりはないから、どっちでもかまはない、同じ事だと思っていたが、よく〳〵考えて見ると、同じ念仏でも、これをあてがう方面の如何によって、多少その趣きを異にする。八面玲瓏とはいいながら、西からみると、東から見るとでは、富士の輪廓に幾分の相違があるようなものである。

第二章の〝ただ念仏〟は師が手ずから弟子に授ける巻物一巻である。念仏の奥義がこれにしたためてある。末尾の〝ただ念仏〟は、その奥義に精通した弟子が、念仏の正味を嚙みしめて、玉石混淆を嫌って、他のあらゆる似而非者をはねのける篩である。

してみると、さきの闇中に閃めいた〝ただ念仏〟は巻物一巻の〝ただ念仏〟であり、信仰を抜きにした人生の諸相を〝それがなんだ、俺にはただ念仏がある〟の掛声で、飛び越え、〳〵したあの〝ただ念仏〟は要するに篩の〝ただ念仏〟であったのである。

〝煩悩の犬は追えども去らず涅槃の月は招けども来らず〟とはよく聞く事ではあるが、私の〝ただ念仏〟はそうでない。追えども去らぬ煩悩の持主の私に、招かざれどもつきについて、毬のように離れようとしないのである。

随時随所、念頭に浮ぶのである。神秘の兜を捧げて、湖畔にたたずむ八重垣姫を繞って、黙々として燃え出でる狐火のように、私はここに袖を捕えて離さぬという摂取不捨の利益〝我能護汝〟という御約束のありがたさを体感して、今更のように唖然たらざるを得ない。

〝我能護汝〟の御約束の前には〝汝一心正念直来〟とある。この〝一心正念直来〟というのが、本願招喚の勅命、即ち

〝ただ念仏〟と全く同義である。謂わば一心は〝た〟であり、正念は〝だ〟である。直来は〝念仏〟である。一心正念直来は〝ただ念仏〟の飜訳と見られる。

ついでに直来の訓読について一言して置く。直来を直に来れと読むべきは言うまでもないことであるが、放浪の子が故郷へ帰って来る日を待ちかねる母の心に譬えれば、直来にスグキテオクレヨと仮名をふる事も許されよう。

あ、〝一心正念直来〟〝ただ念仏〟――この外に何があろう。前に私は、もし生きたら、私の全心身を呑み込んだ――怪物、ではない、歎異抄のところ〴〵について有縁の人と語りたいとの、最後に只一つ残された念願を打明けた。だのに幸いに生きながらえて、今その念願を果そうとすると、呆れたことには何にもない。綺麗さっぱりとなんにもない。おかしな譬だが、鳶に油揚をさらわれた野呂馬のように何にもない。たった一つ、依然としてあるものは、〝ただ念仏〟だけである。

あの当時、あの勢をもって迫った歎異抄、特に第九章後半の如きは未だかって覚えない迫力をたくましうして〝いそぎ浄土へまゐりたき心のなくて〟〝死なんずるやらんと心細く〟〝苦悩の旧里はすてがたく〟〝力なくしておはるとき〟〝いよ〴〵大悲大願はたのもしく〟など、言々句々私の一呼一吸の感があったのに、今は〝ただ念仏〟ばかりとは。

が、考えてみると別に不思議はない。実は既にあの当時、それからそれと思い浮んだ文言も口の中で誦するに従って、片っ端からすぐ〝ただ念仏〟に還元されたのであった。だから歎異抄全体は、要するに、徹頭徹尾〝ただ念仏〟の連鎖に過ぎないのであった。わざ〴〵岡山から見舞に見えた信友に、半ば遺言の意味をこめて、この趣きを話した事を覚えている。

そうだ。〝ただ念仏〟は、源であると同時に海であるのだ。独り歎異抄には限らない。なんでもかんでも、真実一切の權威ある文献は、皆ここに発起し、皆ここに帰入するのである。今死ぬという矢先に、長々しい文句や、こみ入った筋道がわからなくてはいけない、では間に合わない。これだけは心得おくべしなど、条件がついては、やりきれない。〝ただ念仏〟の一つにおさまればこそ、ほんに〝たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ〟である。

その〝ただ念仏〟がほっかり念頭に浮かぶ。それがそのまま如来廻向の念仏ではないか。それがそのまま〝行者のためには非行非善〟としての念仏ではないか。それがそのまま、〝念仏申さんと思ひたつ心〟ではないか。そして此の心こそ、信仰生活の始中終を貫く常住不壊の生命である。〝ただ念仏〟から連想してか、御文で聞きなれた〝ただ白

骨のみぞのこれり〟というお言葉に想到する。さらにその語呂に合せて〝ただ念仏のみぞ残れり〟と、くちずさむ。信ある人の臨終の或刹那には、あってもいい羨望にあたいする転向だ。ただ念仏のみぞ残れり、さてその次に来るものは〝速到無量光明土〟の大團円だ。

「仏と人」より抜、

――――○――――○――――

帰郷

田端　明

私にも故郷がある

ハンセン氏病という悲しい病の涙に濡らされた故郷

美しい緑の山谷川のせせらぎみんな悲しい涙に濡れている

私が生きている限りこの悲しい涙の滲み跡は消え去る事はない

郷愁の涙が潮泡白く漂う磯に消えてゆく

悲しい涙に濡れた故郷　佗しさに耐えて生きている故郷

私の生れた故郷

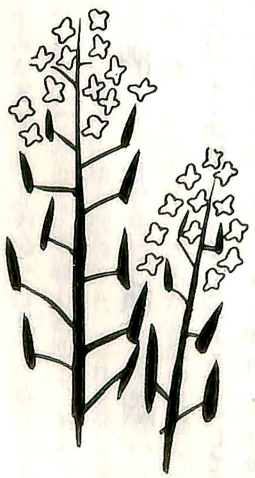
帰りたいけれど帰れないハンセン氏病という病は癒えても失明という後遺症がもとの姿に治ってくれないから

悲しいけれど仕方がない　白骨になったら　小さな壺の中に入り　遍見というくろがねの柵をそっと抜け

静かに眠る母の故郷へ帰って行こう。

佗しさに耐える涙の冬銀河湖白く漂う磯に

於　愛生園



生活断片

酒井演幽

○

病床の人となってはじめて刻々の生命の真価を知る。刹那の生命をも粗末にしてはならぬ。勿体ない。私たちは生命の浪費者であってはならぬ

○

平常の健康に馴れて健康の尊とさを知らず、生命の真価を見落して生活する。知らず識らず生命の浪費者に堕落している。これほど或る意味に於ける大患があろうか。

○

病気、それは我れにとって生ける経典であり、病室、それは我にさずかりし禅堂である。

○

一花ひらいて天下の春を知り、一葉落ちて天下の秋を知る。一滴の海水の味をあじわう。それはやがて大海の潮を味わったことだ。

○

私たちの生活にはよく誤解ということがある。そして自分も苦しみ、かなり人をも苦しめる。人を誤解したり疑ったりは平気でするくせに、自分が疑われたり誤解されたりした場合は中々平気ではすまさない。

○

誤解されることを毒虫よりもきらい、誤解者を仇敵として限りなく呪う。そして苦しみと悶えとを深め事件を深刻化する。要するに私たちは自己の真価を知って欲しい、否真価以上に評価して欲しいという本能的念願を裏切られた恨みとも云うべきであろう。

○

然し静かに内省しよう。もし望みの如く私なるものの表裏、内外、一切を尽くして、あるがままの真相を悉く理解し、知悉し評価しうる人ありとせば、私はその人の前によく生きていられようか……子の前に父として、母として、親の前に子として、夫の前に妻として、妻の前に夫として、

生徒の前に教師として、又友人の前に、社会の前に……恐らくすべては破滅に帰してしまうのであろう。

○

かく思念するとき、私たち今日かく生きていること、否生かされていることは如何に限りないお恵みではないか。然も私の醜き目もあてられざる真実の相を見のがし、寛容して、さも立派なひとかどの一人格でもあるかの如くに思わせている。誤解の賜でなくて何であろう。誤解！おおそれは何とかたじけない事件ぞ、感謝の外はない。合掌。

○

更に思う、誤解そのものに両面のあることを、一は私にとって迷惑な誤解であり、一は私にとって有難い誤解である。どちらの誤解がより多く、どちらが深いであろうか。迷惑すべき誤解は恵まれた誤解に比して万分の一にも及ばないことに気づく

○

私たちは誤解によって過分に恵まれて生かされていることを忘れて、僅かな迷惑すべき誤解を苦にして人を裁き、人を呪いもだえ、自他ともに人生を暗黒ならしめる。何たる不心得ものであろうか。

かく云えばとて迷惑な誤解を如何にまねこうともかまわぬというのではない。どこまでも他人の疑いや誤解を招くおそれあるが如きは、こと些細なりとも徹底的に反省してつつしむのが地上に生活する私達の義務であり責任であることは云うまでもない。又、かりそめにも人を疑ったり誤解したりすることはつつしみたいものである。

○

自分にとって、かくすることが真実に生きる道であり、かくして生きる外に道がないと信じて生活するとき、もし他人が何らかの感ちがいをし、又、ためにするところがあって、わざと中傷し誤解し疑い、ぬれぎぬを被らせることがあろうとも、私は憤らず呪わず、恵まれた誤解の利息払いとして安らかに生きよう。

○

ことかわった美しいことをするよりも、見ぐるしいことを仕出かさず、静かに地上の一生を終ることが中々むつかしいことを痛感する。

○

恵みをこばみ、救いにそむく、他人から嫌われ軽んぜられる。心のおきどころ、これを発見したことを信という。

祖聖曰く「心を弘誓の仏地に樹つ」と。これを発見せしめて下さる方が弥陀仏である。——本願力廻向——ああ。

「地獄は一定すみかぞかし」との仰せは私への烙印である。罪あり乍ら救う、の大悲は絶望の堕地獄患者への輸血だ。

吾子の死に思う

佐々木　徹　真

去る一月二十二日、長女の三回忌をつとめた。宮地廓慧先生の御法話をいただき、有縁の方々数名と、世間出世間について四方山を語り合い、半日を法味ゆたかに過ごさせてもらった。

この頃では、子供を死なせた当時の痛々しい悲しみもうすらいで、劫って子を追憶するなつかしい思の方がまさったようである。もう年回法事というような意味ではなくて、毎年この日を我が家の宗教日として、同信の方々と共に念仏申したいと思っている。

吾子は浄土に生れている。そのお浄土とは？　これが子供を死なせた直後、私に求められた家内の問であった。家内は仏縁に恵まれ、素直に仏法の中に育ってきたものである。それで、お浄土についても日頃よく承わって、一往心得ている筈である。その心得ているものが、愛児を失った悲しみの中から、吾子の往きし浄土を問題にしてきたのである。この深刻な問は、また私の問題でもあった。私も浄土についての教学的説明は、一通り心得ているつもりである。しかし、今の私には説明された浄土、心得た浄土ではどうしても落着けない。私自身が、それ以上のものを求めているのである。

「お浄土に参っているにちがいない。然し、そのお浄土とは……私にも答えられない。私にもわからないのだ。これは我々二人の問題である。わからない我々は、直接釈尊の教を頂くよりほかに道はない。涙の中から改めて経典を拝読しよう」

こう云って、最初に頂戴したものが『観無量寿経』であった。

往昔、我が子阿闍世のために深宮に閉置されて、愁憂憔悴せる韋提希夫人の前に釈尊が降臨されて、韋提希一人のために説かれたのが『観経』であった。愛児を失って悲泣せる我等二人は、まさしく韋提希の姿である。それ故、私が『観経』を拝読することは、忝けなくも私の書斉に、大聖釈迦牟尼世尊が降臨し給うて、私に同悲の涙をそそぎつつ、業苦に泣くものの救わるる道を説き示し給うことである。

こんな気持で、中陰の間に、毎日『観経』を心読した。かくて涙の中に頂いた『観経』の味嘗は五三にして尽きない。然し、今それを語ろうというのではない。

ただ長女の死は、私の宗学研鑽の態度に根本的反省を促した。そのことを告白したい。借りものの学説、身に即かない人生観では、間に合わぬということを痛切に教えられた。宗学に志して二十数年、その間には、行信半学と云われる煩瑣な行信論に、苦労したこともあった。先哲の講録を忠実に読んだこともあった。然し、それはあくまで学解であって、行学とはならなかったようである。それは智的欲求、理性の満足という私の一部分の問題であって、私の「いのち」の学問にはならなかった。然し吾子を憶いつつ涙の中に『観経』を拝読することによって、初めて私には経典を読む眼が開けたようであった。もはや名聞利養の学ではなくて、出離生死のための学問となった。「学問せば、いよ〳〵如来の御本意をしり、悲願の広大のむねを存知」せしめられるようになった。学問はそのまま念仏になるようになった。ひと頃は、しきりに真宗学の方法論ということをあげつらい、宗学に学問的体系を与えることをもって自任していたこともあった。従って、しば〳〵哲学的思惟をそのまま真宗学に用いる愚をも敢てしたものである。省みて、まことに愧かしい。

学問的、理論的ということを常に考えていた私であったが、今ではそんなことにも用はない。むしろ、それが如何に理論的な著述であっても、しみじみとした著者の人生観が滲み出てくるものでなかったならば、もの足りない。如何に学問的なものであっても、読後お念仏が出て来ないような著書であっては、もの淋しい気持がする。

現代人は敗戦という厳しい現実に痛めつけられている。この苦悶を自ら深く感ずる学徒によってこそ、真宗学は再建されなければならぬのではあるまいか。徒らに古人の糟粕をなめて得々としているのでは、宗学はいつのまにか古典学になってしまうだろう。私の宗学に点睛せしめたものは、吾子の死であった。

昨年の三月九日に、今度は男の子が生れた。新しき喜びに、私達は長男を「亮」と名づけた。これは御本山より長女に頂いた法名「妙亮」の一字をとったのである。

新しく生れた子を呼ぶところ、常に死んだ子を思わんとする親の悲願からである。そして生れた子も死んだ子も共に御法の中に生かさるる。こう思って、殊更に法名をつけたのであった。

見ゆるもの、見えざるもの、念仏の中にこそ倶会一処である。念仏申すところ、常に相逢う世界を感得せしめられる。悲しきままに満たされるのである。善もほしからず、悪もおそれなし。罪悪も業報を感ずることあたわず。諸善も及ぶことなき、まことに念仏は無碍の一道である。これが私の身証である。

私は幼にして母に死別し、長じては子に先き立たれた。業報を通じて私の罪深きことを思わしめられる。罪業の深重なるを思う時、いよ〳〵仏心者大慈悲が念ぜられる。仏心者大慈悲を根底として散善自開の仏意もうけとられる。この仏意を体して下々品の経説をうかがうとき、臨終の善知識も了解せらるる。そして私は善知識の中に更に一人、死せし吾子を加えたものである。

小児往生の問題については、すでに云い古されている。然し、この問題を第三者的に考えることは、方法的には意味のないことである。それは親自身の問題になってこなければ空しい。そして親自身の問題が解決されるところに、小児の往生もまた解決されるのではあるまいか。私の悲しき体験においてはそうである。

春寒料峭の頃、僅かに二日間の疾患で、忽然と往きし吾子を憶う。そして念仏せしめらるる。今年はヂフテリヤの流行も激しくないらしい。ありがたいことである。

『人生に思う』より

我春集

一茶道人

昔々、清き泉のむく〳〵と涌き出る別荘を持ちたるものありけり。たやすく人の汲みほさん事を恐れて、井筒の廻りに覆におおひを作りて、年を経たりける程に、いつしか垣も朽ち、水も悪ろくなりて、茨おどろおのがさま〴〵に茂りあひ、蛭予々ところ得顔に踊りつつ、遂に人知らぬ野中のむもれ井とぞなれりける。

此道志ざすも又さの通り、おり〳〵魂のかびを洗い、つとめて心の古みを汲みほさざれば、彼腐き俳諧となりて、はては犬さえも喰わずなりぬべき。されどおのれが水の嗅きは知らで、世を恨み人を誘りて、ゆく〳〵理屈地獄の苦しみ免れざらんとす。さるを嘆きて、籠山の聖人、年かしこく此俳崛をいとなみ、日夜そこにこぞりて、おの〳〵練出せる句々の決断所とす。春の始より入来る人〳〵、相かまへて、其場のがれの正月言葉など必ずのたまふまじきものなり

文化七年十二月　しなのの国乞食首領一茶

来生の開覚

井上善右ヱ門

歎異抄の第十五条に「来生の開覚は他力浄土の宗旨、信心決定の道なり」とあります。この来生の開覚という言葉には深重の意味がこめられていると思います。

総てのものは此の世で終る、身体も富も名誉も学識も、すべてが此の世のものであり、此の世のものであるかぎり、此の世と共に終る、それは当然のことでありましょう。ところが、何故に人間は死を怖れ不安を感じるのでしょう。此の世のものに執着し、別れて去るのが悲しいという事もたしかにあります。しかしただそれだけでありましょうか。

人間の生命の中にはただ此の世の身だけでは済まされない何かが宿っている。ところが人間の意識はそれが何であるかを容易に見出すことができません。そして本能的な常識は身体が自己の総てだと思いなしているのです。こうした矛盾が意識の底深く潜んでいるために、何が不安ともわからぬままに、死に対してすべての人は暗いおののきにおそわれます。だとすれば、この不安は人間のみに生じる厄介な感情ともいえますが、同時に人間にのみ与えられた貴重な感覚とも言えます。なぜならば、この放置出来ない感情を手がかりとして、人間は生命の最も大切な眼を開かれることともなるからです。この点は十分に確かめておかねばなりません。

先に此の世だけで済まされないものと言いましたが、それは人間に永遠なるものとの関係が宿されているということです。そこに生死を離れる願いが起り、不壊なる真実への要求が生じます。この要求ある故に人間には自己の虚仮不実もまた問題となるのです。ゲーテが「空に輝く星への感動を忘れたとき、人間は最早や人間でなくなる」といったのもその意味を語っています。

しかし、その永遠なるものは、とても〳〵人間の思考や感情で捉えうるものではありません。自然法爾章に「無上仏とまをすはかたちもなくまします。かたちもましまさぬゆえに自然とはまをすなり」と示されています。ところが

この永遠なる真実は決して隠れた状態に止まっているのではなく、必ずそれ自からをわれわれの前に開示せずにはおかぬのです。真実が真実であればあるほど、この私を捨てぬのです。それを同じく自然法爾章に「かたちもましまさぬやうをしらせんとて、はじめに弥陀仏とぞききならひてさふろふ、弥陀仏は自然のやうを知らせんれうなり」と申されています。永遠の真実界をわれ〳〵に知らせんとて阿弥陀仏となりたまうたということです。真実は何としてもこの私を摂め取らずばおきません。それが法蔵菩薩の誓願として今現に私の前に現われている所以です。

誓願は物語りではありません。誓願を道理として聞くのではありません。誓願はこの身に不壊の真実を伝える生きた喚び声なのです。法蔵はいついかなる時も、この身に随順して宿りたまうてあります。木村無相さんは詠われました。「涙には涙に宿る仏あり、そのみ仏を法蔵という」なんというしみじみと身の髄に響く言葉でありましょう。真実はこの私の一切を包み貫いて、生命の髄にまことの光そのものをおくり届けて下さるのです。南無阿弥陀仏とはその本願の一道であります。

南無阿弥陀仏の御名のただ中にいだかれて、真実の光に浴するとき、法爾として永遠なるものの生命に触れます。疑うにも疑いようのない事実に直面するのです。直面するといって何も対立的に何かに会うのではありません。ただこの胸に大悲の真実であることが徹するのです。ただそれだけであります。信心という何か特別な心を私が持つのではありません。いや、如来の真実の前に私の心は消散するのです。歎異抄には「ただほれ〳〵と弥陀の御恩の深重なること常におもひ出しまゐらす」と仰ぎ嘆じられています。そこには弥陀の真実が輝くばかりで、余分なものは何もありません。だから金剛なのであります。親鸞聖人が金剛心といわれたのは、最早や破れも毀れもせぬ仏心の真実をいただかれたからです。

行き詰っていた我が心が仏心に遇うて開かれるということは、仏心の智慧の光がわが心におくり届けられるからです。愚かなる心が愚かなるままに光に浴するのです。それによって愚かさが改まるのではないけれども、闇の中の愚かさが光の中の愚かさとなるのです。そして仏徳にうるおされるおもむきを聖人は「至徳の風静かにして衆禍の波転ず」と讃えられました。

永遠の真実がこの身に通い来ると、その光に心が更生します。そしてわが命が業繋の身体に限られたものではなく、如来の御いのちと共にあるという自覚が生じます。その如来の御いのちはただ私を摂取されているだけではありません。摂取ということは、真実そのものにこの私を必ず一味

たらしめんという誓いの故に現われているのです。自然法爾章に「ちかひのやうは無上仏にならしめんとちかひたまへるなり」といわれているのがそれです。

煩悩具足の業の果報を背負うているこの身は、その果報の存続するかぎり、たとえ摂取の中にあっても人間であることを免れません。その果報の滅するのはこの身の終る死の暁です。才市老人の詩に

今の世の暮れたのは
先の世の夜明けなり
御恩うれしや
ナムアミダブツ

とうたうているのもそのこころであります。

有漏の穢身と永遠の真実とが、離れるにも離れることのできない関係に結ばれていることを知らしめられ、しかもこの身は煩悩具足である現実をじっとみつめて誓願を仰ぐとき、その真実と一味たらしめられる彼岸を来生として感ぜずにはおられないのです。それは現在と未来という意識の中に生きる人間として極めて自然にして必然な自覚ではありませんか。来生ということを此の世の延長のごとく構想して思い画くところに夢物語りと評されるような結果が生じます。しかし真実の宗教的自覚としての来生はそんなものではありません。

摂取不捨の心光をたまわるものの来生は、開覚のよろこびに輝く命の行くすえです。永遠と自己との関係はそこに見事に成就され全うされているのです。その意識は最早や動かしようがありません。稲垣瑞劍師が、往生の期の近き頃、次の一首を残されました。

雲に入る鳥みるたびに思うかな
願に乗じて天翔る日を

ここに改めて「来生の開覚は他力浄土の宗旨、信心決定の道なり」という言葉が有難く味わゝされるのであります。

昭五十九・二・五日、校了

○　○　○　○

讃唱歌　伊藤左千夫

人心あやふきものと思ひ知り尊きみ名をせめて申すも
○
吾がこころ暗くしあればみ仏の光こほしみ止む時もなし
○
よき人の心とほれるみ教にわが世百年楽しきを経め
○
さびしさの極みに堪えて天地に寄する命をつくづくと思ふ

一道会の記(二)

榊原徳草

次ぎは**山田宰先生**のお話であります。(録音不良の為原稿でお送りを御頼みしたものであります。)

最近欧米の人達の中で、お念仏に関心を持つ人が出て来たように見受けられるが、本来人間として共通のものを持っているわけで、長い年月ヨーロッパに伝わってきた諺など、我々が聞いて本当に成程というか、打たれるものがある。これはほんの私の目にとまった僅かな例に過ぎないが、例えば「四十才以上の顔には自分に責任がある」とか、「真の友達を知るのは不幸の時である」とか「自分にして欲しくないことは他人に施すなかれ」というようなことなど、何か考えさせるものがある。日本でも「自分には厳しく他人には寛容であれ」ということがよく云われるが、実際には自分に寛容で他人には厳しいということになってしまうのが現実の我々の姿のようである。贈収賄事件でも、上の人は名誉のため最後まで頑張るということが通るようであるが、下の人は懲戒免職となるわけで、自分に厳しいことは大変難しいことである。フランスで親しくしていたある方が「パスカルの言葉に『人間の如何なる行為も自己の利益から出ないものはない』とある。例えば貴方が誰かに恵みを施すとする。しかしその本心は施したことによって自分は非常に寛大な心の持主であるという気持を持ちたいのである。我々は残念ながらそれが現実である」とその方がいうその顔には笑顔はない。何か真剣な、しかしできる得るならそうあって欲しくないのだがといった顔付である。そのあとで誰かがこういうよいことを施したというような話になると、急に顔がくずれて明るい表情となった。これは我々にとっても大同少異ではないかと思われる。たゞ問題はそこでお念仏が有難いかどうかということであろうかと思う。

親鸞聖人は愚禿悲歎述懐の中で御自身のことについて「浄土真宗に帰すれども、真実の心はありがたし、虚仮不実のわが身にて、清浄の心もさらになし」「外儀のすがたはひとごとに賢善精進現ぜしむ、貪瞋邪偽おほきゆえ、奸詐ももはし身にみてり」「悪性さらにやめがたし、こころは蛇蝎のごとくなり、修善も雑毒なるゆえに、虚仮の行とぞなづけたる」と述懐されるそのお言葉に対して、これは親鸞聖人の悲痛なお叫びであるということを言われた方もおられるが、悲痛なお叫びには違いないが弥陀のお慈悲をひしひしとお感じになっているその事実をこういうお言葉で現わされているのであって、こういっておられるお顔を拝見することができたら、悲痛のお顔ではなくて、弥陀のお慈悲を頂いたよろこびのお顔ではなかろうかと考えたことであった。ヨーロッパ人にもそこにお念仏のお慈悲が届くのは、なかなか難しいと思われるが、難しいという点では我々も同じことではないかと思う。

私共は毎日の生活では、よいとか悪いとかいう事ばかりで、私自身その中から一歩も出られないで生活している。何か失敗しないと気付かない、調子よく行っている時は全く気付けない馬鹿者で、念仏には用事のない、信心の浅い毎日である。ここで何と云っても恵心僧都のお言葉が有難い。「信心あさけれども本願深きがゆえに、たのめば必ず往生す。念仏ものうけれども、称うれば必ず来迎にあづかる。」このお言葉がまことに有難い。

次に**稲津紀三先生**のお話は大略左の通りでありました。

私は大正十二年迄、それ迄は東京の一つ橋におりましたけれども、父の菩提を弔う外はないと思い、何かがささやいて、先ず京都大学に籍を置いて、それからやろうとしました。以来昭和十三年頃まで京都に居りました。その時分に池山先生のことは存じ上げませんでした。京都大学では哲学科の人々と勉強して専攻は印度哲学、仏教学です。池山先生より前に先生を大変慕って居られた、その時分宗教的天才と思っていました所の花田正夫先生、もっと前には浄住寺の榊原先生と如何なる因縁か大変親しくなり、この御部屋あたりを騒がせた、私よりも榊原さんは年長で私はこの通り劇しい性質でして、徳草さんは大らかでありまして、兄貴という感じでした。一例を申しますと、榊原さんがお母さんから岩波書店の哲学辞典を卒業祝いに記念として頂かれた、それを私が借りて行って本屋に質に入れて流してしまった。それを返せと云われて、それを東京へ行ってからもいつ迄も申されました。手紙で「あれは臨済大学卒業記念」として母の記念だからと。お金で返しても駄目だと。

そのうちに横田先生、池山先生と、後には池山先生ひとすじになりましたけれども、池山先生の感化を受けるようになったのは、ほぼ同時でした。その頃学問的には、釈尊の学問的伝統というものを考究して居りましたが、自分の

信仰の問題がありました。そうなりますと親鸞聖人、それは「親鸞会」に入らぬ前でした。親鸞さんか道元さんか、道元さんに引かれましたが、それに従って行くと一生一人身で暮らす事になり、それで親鸞聖人に従いて行くこととなりました。聖人が二十九才の時本当に信仰に導いて下さる善知識を求め六角堂に比叡山を下りて、毎夜参籠される、そして百日の結願に、それは後に恵信尼の文書に書いてありますが、満願の日に加茂川の畔をとぼ〳〵と歩んで居られる、そこで聖覚法印に導かれて法然上人に、「雑業を捨てて本願に帰す」と、それが二十九才の時と承っております。私も恰度、その年令の時に或る師の下で初歓喜地の経験を持ちました。聖人の道を一生歩もうと思ったのであります。それから池山先生に会いました。歎異抄は信心の極意が現われていると申されました。花田先生なども歎異抄の極意がまだよく読めていない、二十願の念仏だと言われ、それから自分の今迄の考えも心も捨てて、歎異抄と対決したことがございます。それから何か得たと思うと金閣寺裏山の池山先生を訪ねました。今覚えているのは先生から歎異抄第九章を。その時の感動をもってこれが読めるとグン〳〵引き上げられますよと。話が飛びますが、吾々学生が社会人も集って来ると、先生の愛して下さる人々は、そういう人々の居る「聖鸞寮」じゃないかと思います。いつもお越し下さって心からの叫びを聞かせて下され、これは先生として並々ならぬ御精進の体感で、説法は聞く方と話される方と大変な違いで、それを思わずに居りましたが、それを今、敬愛する榊原さんのこの由緒深い所で、この法燈が護られて居られる、これ又稀有のことで、私も前に一度伺ったことがあります。こうして多数の方の御参会、これだけの御集りができるということは、大変なことです。又このお寺は今は黄檗宗ですが、曾ては叡尊上人が御旅所として在った所、御泊りになった。親鸞聖人と幾らか時代が違いますが、四天王寺の別当をされました。聖徳太子を深く崇敬され太子信仰を関東から関西へ弘められた。是方には池山先生の碑、御墓があり、そのことは東京の方へまいりましてからも、現在も私の歩みの上に長い光でした。然し先生はお解り下さると思いますが、そういう親鸞会から云いますと私は異端者でございます。私は今、八十一才になりました。私は最近、心臓が止る寸前迄参り退院して一ケ月です。実は私に残された大望がございます。異端者と申しますのは、一時歎異抄の中に行き当るものがありました。「故人の跡を求めず、故人の求むる所を求む」これは芭蕉の左右の銘ですが、之は弘法大師から出ているのです。それが即ち「歎異抄の跡を求めず、歎異抄の求むる所を求む」歎異抄は親鸞を求めていますが「親鸞の求むる所を求

む」。親鸞と名告られましたのは、彼自身の信念の成長である。親は「天親」の親、「鸞」は曇鸞の鸞、天親曇鸞の指南によって、新らしい浄土の中に真実を見出し、そのことに確信が立った時に彼は親鸞と名告った、これは大変なことで、それはいつ頃かと思うのですけれども、私はそれを法然上人がおかくれになった後、一人になってから、越後から関東へ移られた後だと。私、釜石の方へ呼ばれてまいりました時、題を出してくれと云われ、「歎異抄に入って歎異抄を越える」と。その時はまだ出ていなかったので、歎異抄に入って、それを出る所までしか話せなかった。後で別れぎわに若い女性が、今の御話は歎異抄に入る所ばかりで出る所が無かったと云われました。歎異抄は聖人の御信仰上の考えなら、異る所を歎いてこんなことを言い出すと。それから「先師の口伝の真信に異ることを歎き、後学相續の疑惑あることを思うに、幸に有縁の知識によらずんば、いかでか易行の一門に入ることを得んや云々」と。唯円さんは二十才代と想像されるが、そこには聖人の御孫さん如信上人が居られたと思う、その頃の印象を思い浮べて書きつけたと思われる、唯円さんが関東で聖人から受けたその聖人に会うこと、それがなかなかわからなかった、それで教行信証に入り、それから結局「唯信抄文意」により、この文意にあらわされているそれを書き綴った親鸞、所が親鸞聖人についても「教行信証」は五十八才、六十才で書かれた、それから後、親鸞さん何かあった、信から証へ、還相廻向へ、それが晩年の課題で、それは「如来世に興出し給ふ所以は、只弥陀の本願悔を説かんとなり」それは釈迦が説かれた法です、何を説かれたか、結局、説いている「人」が問題になる。弥陀の本願海は釈尊が説かれた、それを求める。釈尊をどこでつかまえるか、智識で求めても出て来ない。「私は『アノクタラ・サンミヤクサンボダイ』から求める」。仏教は結局何を求めるのか、結局親鸞さんは何を得させようとするのか。

この間、東京の本願寺で御話があり、「親鸞に学ぶ」というテーマで「観無量寿経について」とあった。そんなことをやっておられるから駄目である。自然法爾章に「誓いのようは無上仏にならしめんと誓い給えるなり」とある。人間は必ず無上仏になるより外に成りようがない、「無上仏というは形もなくまします」。それが「無上等正覚」(アノクタラサンミヤクサンボダイ)であります。自然法爾章の始めに「因位のときにうるを獲という、果位のときにうるを得という」私は長いことこれが判らなかった、聖人は八十八才で、得はアノクタラサンミヤクサンボダイを説かれた。飜って「和国の教主聖徳王」「還相の太子」そこの所を、明日香精神、明日香は「明日が香る」ことで、過去

への事ではない。明日香の心が漸く思われる。仏法も政治も教育も、このことが一番大事なことと思っています。それを池山先生に申し上げたら、成程なァと申されると思います。そのことの為に残しておきたいことは明日香の土地に日本に太子並に推古天皇によって寺が三つ造られ、始めに建てたのが明日香寺、難波の四天王寺、法降寺の前身の飛鳥寺、飛鳥寺が日本国の柱という意味合で建立され、日本最初の寺で併し日本の現状に必要な寺、それである、それで飛鳥寺はそのままにして、私が今居る寺が孝養寺と云い、もと真言でございます。宗名が無いといかんので三法宗と言い、元あった因習がありましたが形が作られましたので寺の名は、明日香院とし、日本に明日香をという、そんなことを考えて居ります。これも池山先生の法統から生れて来たものであります。やんちゃ者の私、今「飛鳥の心、無上等正覚」を提唱し始めて居ります。失礼致します。

これで終りましたが、西元先生から、私に何か云えとのことで、次のような閉会の言葉を述べました。

今年の一道会には、珍しく稲津先生が御来演下さって誠に有難いことでありました。私此頃思いますことを一口申上げます。

学者の説によりますと三十一億年前に海の中に単細胞生物ができ、それが弱肉強食で他の生物動物を喰って発達し人間迄に成って来ました。弱肉強食で生命を保持するという宿業の結果であります。現在もこの業を続けている、どこ迄この業を続けるのか、これを続ければ直きに星に成って終うのでないか、地球は直きに星になると思う、そういう生地、生滅の世界を越える世界、御念仏の世界、「生死の苦海ほとりなし、久しく沈める我等をば、弥陀弘誓の船のみぞ、乗せて必ず渡しける」御浄土から此の娑婆世界へ阿弥陀仏からの御呼び声が大音響流尽十方と響いている、御浄土の世界と娑婆世界とは声の波長が違うから、大音は聞こえないが、そこは地獄の釜の上であると十劫以来呼びずめの南無阿弥陀仏であります。戦場に架ける橋という物語がありますが、御念仏は御浄土から此処へ架けて下さった橋であります。種々に善巧方便の限りを尽くされて、今私の口にナムアミダブツの御称名が浮かぶ、橋が届いている、それを渡らして頂く。

「弥陀の誓願不思議に助けられ参らせて」とこの「不思議」とは、私の計らいでは届かない、意識や智慧では及ばない、不思議を絶しているのが不思議の意味です。わが計らいを捨てて、只仏の御呼声を聞信する一つであります。ナムアミダブツ、ナムアミダブツ。

これが現在の心境であります。

今日は、諸先生の御法雨に浴させて頂き、本当に有難うございました。老年になると一期一会が深く心に刻み込まれます。これを以て本年の一道会を終ります。

それから例年のように精進料理の夕べを迎え、多数の法友と食を共にし、時の過ぎるのも忘れるのでした。

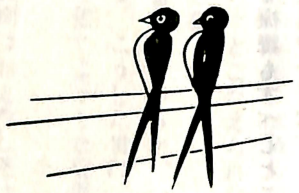
夜は二、三名の泊りの人、それから長崎の人々は詰所の宿舎へ帰えられました。

翌日は又長崎の人々と泊った人々とで、昨日の法雨に浴した温か味を交し乍ら、昼食に昨日の馳走の残りを味った。

長崎の平岡氏夫妻は来春桜花の頃に浄住寺の観桜の会を催すのである。

一期一会の黒幕は懸っている。然し来年の一道会の光りは吾等の眼底に影を写して消えることなく光雲無碍如虚空である。

（十二月六日・誌）



法句経（愚闇の部）

寝ねざる人には夜長く、疲れたる人には路長く　正法を知らざる凡愚には生死長し

愚者にして愚なりと想ふはすでに賢なり、愚にして賢なりと思ふ人こそ実に愚と謂はる

愚者は終生賢人に近づくも正法を知らず、匙の汁味を知らざる如し

智者は瞬時賢人に近づくと雖も速に正法を知る、舌の汁味を知るが如し

○　○

住田智見師

木曽川堤をのぼって行くと木曽山へはいる。お念仏を信ずるとお浄土へまいられる。

香樹院師

「南無阿弥陀仏というはお母さんという事だ」

ともしび

花田正夫

あれから五十余年、煩悩熾盛な身はすこしも変らぬが、いつでも、何処でもこの愛語に導かれて、聖人のふところに帰えらせていただいている。私にとって聖人こそは如来の御代官にましますと渇仰している。

昭和五十八年九月四日。

○

つくべき縁あればつき、はなるべき縁あればはなる。

（歎異抄六章）

人々からよき師と幕われていた聖人が、親鸞弟子一人も持たず、と仰言っている。それはご自身が仏の大悲心に満足されて、独立独歩しておられたからである。そして、縁あればつき、縁なければ離れると、来る者を拒まず、去る者を追わずという、自由闊達な心境を持たれているのには、我執、我愛のかたまりの私には、全く驚異の世界である。

私が学校を卒えて、初めて大連の関東別院に赴任した時、そちらに知人が一人も無いので、早速友人づくりに専念していますが、心の中は人面夜叉で自分ながらあきれるばかりですが、こうした私をもお救い下さるでしょうか」と切実なお尋ねをうけた時「人間の約束はどんなに誓っても、まったが入りますが、仏語に虚妄なし、本願あにあやまりあらんや」と告げると、仏の実語に迷妄の闇が破られて、喜びの涙を浮かべられた。

昭和五十九年一月八日。

○

滅度を示現して極消すること極りなし

（大無量寿経）

遠ざかれば忘れ、離れると疎んじる世に、仏は死して後に人々を照らされるとある。この事を知らされた始まりは、親の死である。生前は軽く聞いていたが、亡くなってから心に深く思い出され、励ましと慰めを頂いている。

次に、紙衣の九十年の親鸞聖人が、八百年後の今日無数の人々の心のよるべとなって下さることへの驚きである。

聖人や、亡き親をとおして、釈尊が八十年の肉身を滅したまうて、法身をもって、あらゆる衆生のともしびとなってくださる事実を尊ばずにはいられない。

われわれはとかく、横へのひろがりに幻惑されて、縦なるいのちを取りおとしがちであるが、一世を風靡した英雄豪傑も、夏草や武者どもが夢のあとと埋もれ忘れられて行くことに、大思一番されることである。

（昭和五十九年三月十一日）

さるべき業縁の催せば如何なる振舞もすべしとこそ聖人は仰せ候ひき

（歎異抄十三章）

貪欲・瞋恚・愚痴をはじめ、あらゆる煩悩を具足した身は業縁次第ではどういう浅間しい業晒しをするかも知れない、と親鸞聖人が、わが御身にかけておっしゃったのである。

さて、これを知らされながらひとごとと聞き流していたが、私の二十四歳の秋、身にもつ鬼心から恩人をも怨むという浅間しい心を持てあまして、こうした身は一切の人から呆れられ捨てられる身であるが、こう仰言って下さる聖人ばかりは、同座して下さって、どこまでも御一緒して下さる方であると気づかされ、暗い心に光が射してきたのである。こう仰言る聖人は、煩悩具足の凡夫のあらゆる心身の動きの中に御自身を見出され、我々は心身をあげて聖人の慈懐の中におさめられるのである。

その時、フト聖人のこのお言葉が胸を打ち、自分の淋しさから友を求めているが、それよりさきに、自分自身が仏の大慈心を順逆の両縁をとおして、心の隅々まで信味させていただくことが緊急であると気づかされた。

そこに、遠ざかれば忘れ、離れると疎んじる世間の鉄則を越えて、仏心に支えられた久遠の同朋が自然に恵まれてきた。この鉄則を越えるには翼が要る。お与え下さる本願の念仏こそ、その翼である。

昭和五十八年十一月六日。

○

五濁悪時群生海　応信如来実言

（正信偈）

源信僧都は少年の頃、慈母の厳誡をうけ、名利を避けて横川に隠棲し、一切経を五回も読まれたが、自身の信心が決定せず、種々苦労の末、空也上人を訪ね、「穢土をいとい一筋に浄土を欣求すれば、往生をさせていただけるでしょうか」と尋ねられた。上人は「それは愚僧には解らぬが、智者（仏陀）の仰せに間違いはない」とこたえられた。このことが僧都の求道に大きな光明となった。

「巧言令色すくなし仁」と孔子は警告しているが、つい調子のよい話にはだまされて後悔する。こうした世に、如来のまことのことば（如実言）をぜひ信じようと正信偈にお勧め下さるのである。

某婦人の臨終の近い日、「私は表面はおとなしそうにし

あとがき

近角先生の「不思議の仏智」への讃仰は、真宗信仰のかなめであります。不思議とは不可解ではありません。相対差別の智恵しか持ちませぬ身に、凡夫成仏の白道が開けてまいるのであります。それは仏の絶対智の御働きであります。

池山先生の「ただ念仏」私共が自力のはからいでなく、如来の御呼び声であります。それをお大病中に深く信味されたお喜びの御述懐であります。次号に「ただ念仏して」の御原稿を『仏と人』から頂きます。これらは先生の信心の基幹でありました。

酒井師は佐々木徹眞さんの恩師であり、酒井師はまた臼杵祖山老師に師事されました。清らかな法水の流来流去することに合掌させられます。

佐々木さんの「吾子の死に思う」の一文は、最近知人の方々が子を亡くされた悲涙あふれる御消息を聞くにつけて、改めて記載させていただきました。「うつし世をあだにはかなき世と知れと教えてかえる子は知識なり」と和泉式部が詠じましたことも忘れ得ぬことであります。

井上先生のお原稿は早くから頂いていましたが、都合で本号にいただきました。「来生の開覚」というと、直線的に考え易いのですが、現生において仏の摂取の心光裡にあって永遠を感じさせて下さるので、その点を解り易くお説き下さいました。御味読願います。

「一道会の記」も早くからいただいておりましたのに木村無相さんの追悼号でおくれました。今回は、岡山大学の山田宰先生と東京の稲津紀三師のお話でした。当日病気で欠席したので、記事を読んで当日をしのび乍らすごしました。

当時、池山先生が私の信の歩みをいつも見護って下さっていたことを知り、あらためて「三願転入」の問題を信味させていただきました。

―――※―――※―――

御案内

○五月二十日（第三日曜）午后一時半、名古屋一道会を開きます。会場は南隣りの鬼頭康彦氏宅。

○五月二十日、午后一時。岡崎市大平町大西杉浦豊氏宅。岡崎一道会。講師、西元宗助先生、榊原徳草師。

おねがい

慈光誌も私の体力から一月々々を単位に編集していますので、一年単位で御送金お願い申します。御賢察下さい。

定価　半年　八〇〇円（送共）
　　一年　一六〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駅上一丁目百一二九　花田正夫
　　電話　八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駅上一丁目百一二九　慈光社
　　振替口座　名古屋　六一(四七)番
　　郵便番号　四五七